



令和元年度 阿佐ヶ谷中学校 第6回学校運営協議会 会議録

日時 令和元年 11月9日(土)

10:00～12:00

会場 阿佐ヶ谷中学校 校長室

出席者

《協議会委員》 石井 良典
岩間 功
大石 秀明
河村 正明
鈴木 政俊
武田 裕美
諸橋 記子
柳澤 正
横山 智彦

《阿佐ヶ谷中学校事務局》

佐々木 啓之(副校長)
長谷川 祐子(嘱託事務)

校長 小澤 雅人



小澤 10月30日に行われたマラソン大会は、前日雨でしたが当日はよく晴れました。体調不良で見学の生徒もいたが、他は全員参加。リタイアする生徒もいませんでした。

約250名中240名近くが走り、タイムは例年並みでした。駒澤大学箱根駅伝部出身で世界選手権に出場経験もある、西田隆維さんにご指導いただきました。1kmを3分台で走れるのに驚いて「こんなに走れるとはおもわなかった」とおっしゃっていました。女子も1kmを4分台で走っていました。素晴らしいタイムです。

来週11月12日(火)にG組の校外学習があります。13日から15日までが期末考査。

12月が私立の事前相談会なので、3年生の成績をもとに進路の方向性を決めなくてはけません。

1・2年の校外学習が20日水曜日にあります。1学年は都内巡りでの体験学習、2学年は鎌倉で文化財を中心に見学します。どちらも班行動です。2学期の大きな行事はこれで終わりになります。

12月の第二日曜日に区の対抗駅伝があります。参加選手が決定します。

男子は3年連続、昨年は男女で優勝しました。今年も上位に入ってくるとよいですね。2月にある都の駅伝の選手も選ばれます。寒い時期ですが、頑張ってもらいたいです。マラソン大会について何かありますか？

諸橋 今年思った以上に気温が上がったので、心配しました。少し熱中症気味の子もいましたが、おおむね大丈夫でした。給水所ではたくさんの子どもが給水していました。

川村 「最後にゴールした子をみんなで迎えた場面では泣けた…」と見学に行った蒲鉾屋さんが言っていました。

小澤 その時はゴール付近の沿道にみんなで並んで拍手で迎えていました。行事の本当の意味や醍醐味がこういう所です。このようなシーンを見て行事の大事さを考えると、なくしたくないのですが、マラソン大会にかかる準備や大変さもあるので、考え直す必要もあると思う。昭和記念公園でマラソン大会をするのは阿佐ヶ谷中くらいではないか。規制が厳しい施設なのでなかなか貸し出してもらえません。

石井 西立川から降りてすぐの公園です。走るコースも途中から規制されました。

小澤 箱根駅伝の選抜に使われるコースも走ります。西田さんも「ここで走れるのは良い事ですね」とおっしゃっていました。



- 小 澤 学力調査の結果をお配りしました。観点に即した捉え方で基準となるものです。学力調査の他に日常生活の調査もします。意識調査では前年度との比較ができます。1 学年の結果が下がっているのが若干心配です。GW 明けに小学校で学習したものがどう発揮できるかが大切です。2 学年は伸びしろがわかると思います。
- 大 石 杉並区の平均が高いのではないですか？
- 小 澤 杉並区がトップクラスということはありません。これは公立学校の調査ですが、中央線沿線が正答率が高いようです。
- 鈴 木 2 年生でグッとあがっていますね、
- 小 澤 3 学年では、特に国語が上がっています。数学はこのところやってきた少人数指導の効果が出てきたのではないかと思います。2 学年の数学で技能は 10 ポイント、平均正答率は 5 ポイントも高くなりました。それなりの力がついてきていると思う。
- 鈴 木 国語力は小学校でつくものですね。
- 小 澤 このところ、小中でデータを交換しています。学習面で連携をし始めています。杉七小では算数、杉六小では国語に力をいれていますが、今はどちらも算数に力をいれています。これは算数の方があやうくなってきた、ということにもなります。国語は話すことは良いのですが、書く力がまだまだです。これは”書く”という機会が減ってきているからかもしれません。これからの問題になっていくでしょう。
- 鈴 木 杉七小は「算数レストラン」をまだ継続しているのですか？
- 小 澤 先生が変わり、今はやっていないようです。
- 大 石 言語活動など何かやっていますか？
- 小 澤 税の作文に応募するという活動はしていますが、過去に比べて出展する事自体が減っている。以前に比べたら行事の後に作文を書くという事も減ってきていると思う。税の作文では表彰もされています。
- 大 石 ICT も発表は文章ではなく、プレゼンになってきていますね。文章から図やデータになってきています。
- 小 澤 専門的には、横山さん、高校ではどうなんでしょう？
- 横 山 書かせるのは後の処理もあるために少なくなっていると思います。阿佐中の 1 年生の国語は少し心配ですね、九九は小学校で教えたならもうそれ以外ではやらないが、物語を読んだりするのは小中つながってやります。捉え方も違ってくるので繰り返しやる必要があります。教師の負担もあり、作文を書かせる機会も減っていると思います。しかし書くことは大事な事です。
- 諸 橋 入学した時の国語や数学の先生の指導力、授業力があると思います。そのおかげで伸びてきているのではないのでしょうか。
- 小 澤 国語は昨年までの 2 年間、指導力・授業力共に力のあるベテラン講師がみてくださり、力がついてきたと思います。

鈴木 木 澤 コミュニケーション能力が上がってきたというのも結果に反映されているのでは？

小 澤 日本人が苦手な”説明をする”という力をつける。指導要領もそうなっています。対話が中心になります。

大 石 家庭で読書をする姿も減っていると思います。図書も減っている。蔵書の冊数と子どもの学力が比例するといわれています。読書の習慣も学校でやっていく必要がある。

小 澤 先日、兵庫県尼崎市の教育委員会が図書室の視察に見えました。昔みたいに”本を読む”ということではなく、タブレットを通してデータを見るということで良いのか…という問題もその時にでていました。

スマホで検索することが多くなってきました。ページをめくるという感覚を大切にするかタブレットでもよいのか。…。何冊もの本を持ち歩くのは大変だからということで、10年後には教科書がタブレットになっているかもしれません。

大 石 この本のこのページのここら辺…という所がタブレットとはちがうところですね。

鈴木 音読させると考えながら読んでいく。調べることもできる。読解力は算数にも必要です。小学校低学年では音読・作文は必要ですね。中学校で音読をさせるのは難しいですか？

小 澤 特別支援学級では音によっては不快に感じる子どももいます。会話には音が必要なのですが…。

大 石 逆に音がないとわからない識字障がいの人もある。また、ホッチキスの音だけでも具合が悪くなる子もいます。難しいところですね。

小 澤 一斉授業は難しくなりますね。K中では一人ずつブースに分かれての個別授業を行っています。しかし、これが進んでいったら教員はコーディネーターであって指導者ではなくなってしまう。

河 村 昔は漢字の書き取りなどの時間がたくさんあり、長い修練があった。今はそういう力が下がってしまった。昔はこうだったのに…という話ではなく、データを元に、「頑張ればよい結果が得られる」ということがわかると良いと思う。数字だけを見ていると、わが子の行く先に責任を感じます。

小 澤 今までやってきたことが否定されてしまう事があり、何をやってもダメなんじゃないかと思うこともある。それで次々とやってしまうが、変えてはいけないものもある。

教育の原点をどう語るかが学校教育の本質だと思う。教員・保護者みんなでその考えを共有していくのが大切です。

マラソンでも「6km 走らなくてはならない」「プロセスを踏んで努力する」「得られるものは子供によって違うが、得られるものは必ずある。」と思うんです。



- 柳 澤 高校受験のための教育ではだめだ。古い考えかもしれないが、「読み・書き・そろばんを大切にしてほしい。社会に出てから役に立つ教育が必要だと思う。
- 河 村 基本は退屈でみんな苦手ですよ。蔵書の話も胸にグサツとききました。
- 柳 澤 それを教えるのが教育ですね。
- 小 澤 学校教育のスタートはそうでした。時代の変遷でやるが増えすぎてしまった。コアなものの中に子どもたちに必要なものを選択せずにプラスして何でもやってしまうと、足跡のない子どもになってしまう。令和をきっかけに棚卸しをして整理をしていきたいのです。
- 横 山 自分の事しか考えなくてよかった子どもを、社会で人の役に立っていきたくと思えるような人間にしていく…というのが教育です。
- 河 村 人格教育でも結果だけを見せて「こうすると、こうなるんだ」という、プロセスを話さないのが良くない。
- 小 澤 「なぜ毎日学校に来て、なぜ繰り返しやるのか？」と考える時に、続けることの大切さ、それによって身についていくという事を教えたい。そうでなければタブレットだけの授業でよくなってしまふ。教員も保護者も続けることの大切さを意図的に教えていく必要がおると思う。
- 鈴 木 習慣づけですね。
- 岩 間 幅広いニーズでの立て直しが必要だとすると、みんなが納得できる基礎的なデータが必要になりますね。
- 小 澤 どこに原因があるのかを見る必要があります。どの区や市や県の学力が学力の数値が高い低いというのは違うと思う。例えば秋田県では家庭できちんと復習をしているというデータがあります。家庭学習は学力を上げるために必要だが、できない家庭はどうするのか…ということで web 教材の導入を考えているが、子どもたちの反応はいまひとつです。
- 英語などでは、OJT(On-the-Job Training 現任訓練)ということで、ベテランの教員と若手の教員との連携をとっていきたいのですが、ベテランの教員が減っていてなかなか若手の教員の授業を見に行ったりできない。特に小学校ではこういった傾向があります。
- 石 井 若い教員の指導ができるような縦のラインがあると良いのですが、そうでないと若い教員でかたまってしまふ。吸収しようというより、自分はできると思ってしまう。やる気のある子ばかりでなく、やる気のない子にやる気をもたせるという指導に気付いている先生がどれほどいるかが問題です。ボキャブラリーが少ないと子どもとの会話が少なくなってしまう。
- 小 澤 若いと機動性は良いが、熟練度が足りません。
- 大 石 会社でも「自分はできる」と思ってしまう人はいます。会話が苦手なんです。ギャップを埋めるのが大変です。

- 武田 先生方は優秀な方が多いので、できない子の気持ちがわかり辛いのかもかもしれません。
小澤 出来なかった経験がない教員にとって反応のない今の子どもたちはわかりにくい。
お互いに”良い子”になっているのかもかもしれません。教員と生徒は友達ではなく”教える
もの”と”教えられるもの”という部分があった方がよいのではないかと。
- 河村 新しい時代になると新しい教えをしないといけないと思っていたが…。
小澤 K中では学級担任制をなくしましたが、集団の関係づくりのためには担任は必要だ
と思う。自分の感覚でしか人と関われない子どもになってしまうので、意図的に関係
づくりをしていく、企画をたてていく事は必要だと思う。
- 武田 K中では担任制廃止でもよいのかもしれないが、阿佐ヶ谷中ではどうなんだろう？
ということを考えていく必要がありますね。
- 小澤 阿佐ヶ谷は学校や地域・社会の人のために進んでボランティア活動をしている。そ
ういう行事があることも大切だと思う。小学校に出向いてボランティアするのも大事
な事ですね。
- 柳澤 小学生に良い姿を見せるのは良いことです。
鈴木 花火大会の時にボランティアで来てくれた子と話しましたが、そんな機会があると
気軽に話ができいいですね。
- 小澤 登下校時に近隣の方から声を掛けていただけるのもありがたいです。
石井 阿佐中は防災訓練等で1年生と地域の方々との交流がありますが、町内など地域の
つながりがなく大人と触れ合う機会が少ない学校もあります。
- 横山 大人との自然なかかわりの中で会話のキャッチボールができるといいですね。コミ
ュニケーション能力とよくいわれますが、自己主張をするのではなく、自然な会話こ
そがコミュニケーションだと思います。
- 小澤 学校で”挨拶しよう”というと、先生と生徒が…とってしまうが、本当の挨拶の在
り方は、それ以外にも生徒と生徒が挨拶できるという事だと思う。
町の中にも波及していけば良い。商店の方に「おはようございます」「こんにちは」
と挨拶できるようになってほしい。
- 河村 一瞬の表情、一言で損をすることもある。そういう事を学ぶこともできる。
岩間 田舎に行ったときに出身の学校に行ったら、皆挨拶してくれて、びっくりしたこ
とがありました。
- 石井 先生だと挨拶してくれるが、そうでないとなかなか大人に挨拶できない子が多い。
阿佐中の子は先生でなくても挨拶してくれますね。
- 小澤 「先生に言われたから」というのではなく誰にでも挨拶できることが理想ですね。
鈴木 外部の人に挨拶できるかどうか、ということでその学校がわかりますよね。
今日は良い教育談議になりましたね。